

願いは豊饒の海

西浦漁業協同組合若衆会

稲吉善伸

1. 地域の概要

蒲郡市は愛知県沿岸部のほぼ中心にあり、知多半島、渥美半島に囲まれた温暖な気候の町で、三河湾国定公園にも指定されています。(図1)

産業では古くから漁業、繊維業で栄え、みかん栽培、観光地としても竹島、温泉、ラグーナ蒲郡などが良く知られています。西浦半島は先端に温泉街があり、三河湾の中心に突き出していることから、渥美半島から昇る朝日、知多半島に沈む夕日が絶景で、古くは万葉の歌人達に歌にも読まれるほどです。このようなすばらしい場所に知柄漁港、西浦漁業協同組合はあります。

2. 漁業の概要

西浦漁業協同組合は376名の組合員からなり、平成15年度の水揚げ量は1,800トン、水揚げ金額は6億5千万円です。営んでいる漁業の種類は主に底びき網漁業です。

3. 研究グループの組織と運営

西浦漁協若衆会は、小型底びき網漁業を営むものなどで構成され、現在の部員数は14名です。昭和60年の設立以来、海浜清掃、視察研修や資源増殖などの活動を行ってきました。

4. 研究・実践活動課題選定の動機

今回はその取り組みの一つであるアマモ場の造成について話をしたいと思います。アマモ場や干潟は、魚の産卵場所や、生まれたばかりの稚魚が成長するのにとても良い場所です。(図2) 私たちの西浦地先でも、以前は広大なアマモ場が広がっており、そこにはたくさんの生き物が生息していました。

しかし、埋立による浅場の減少や、海水が汚れたことでアマモ場がどんどん減少し今ではその陰もありません。そこで、私たちはアマモを復活させ、自然の魚の産卵場・稚魚の成育場を取り戻し、資源を増やそうと考えました。

5. 研究・実践活動状況及び成果(効果)

平成9年から組合の南側にある浅場にアマモを移植してきました。移植方法は竹島地先にあるアマモ株を持ってきて植え込み、番線を突き刺して固定するという簡単なものでした。(図3) 平成10年、平成11年と活動を続けた結果、今ではすばらしいアマモ場が復活しました。(図4) そして、さらにアマモ場を広げる目的で、平成12年から、中山水道浚渫砂によって造成された人工浅場にもアマモの移植を行うことにしました。(図5)

しかし、その成果は思わしくありませんでした。中山水道浚渫砂はアマモが生えるのに適した砂粒より少し細かく、浅場が造成されたばかりで、風波や潮流によって砂が動いてしまい、これまで行ってきた番線による固定では移植したアマモが流されてしまうことが

わかりました。(図6) そこで、鹿児島県で行われたことのある、園芸ポットによる移植を試すことにしました。(図7) ただし、自然に手を加える以上は環境に配慮する必要が生じました。

そこで、土に埋めるとバクテリアなどによって分解される生分解性プラスチックで作られた様々な容器と、麻や、大昔の苔が固まってできたピートモスと呼ばれる自然の材料を使って作られた容器(図8)で試験移植することにしました。

まず、竹島地先のアマモ場から株を採取し、翌日にそれぞれの容器に入れ、移植を行いました。(図9)

この試験によって、移植の際にアマモだけで運ぶと葉がからまったりして、てまどっていましたが、ポットなどの容器に入れると楽に作業ができました。生分解性のプラスチックポットは土に埋まると、2週間ぐらいでボロボロになるということでしたが、水中では違うようで、なかなか分解はしませんでした。麻網目ポットは半年ほどで腐るということでしたが、1年たっても柔らかくなる程度でした。ピートモスポットは紙のようなものなので、アマモを入れると水分でふやけてくずれてしまい、とても使いづらいものでした。

これらの結果から、麻網目ポットは、すぐに分解して無くなることはなく、生分解性プラスチックより値段が安いということから、移植には麻網目ポットを使用することにしました。そして、本格的な移植を平成15年5月に行うことになりました。まず、少しでも風波や潮流による砂の動きを和らげるため、支柱を打ちました。隣接の東幡豆漁協地先にあるアマモ場に船で行き、スコップなどで採取しその場にて直接アマモ株310個を麻網目ポットに入れ、海上輸送し移植を行いました。(図10) また、この日には佐久島中学の生徒も参加し、一緒にアマモを移植しました。また、アマモ移植の先進県である、岡山県の日生町漁協に視察した際に、直に種をまく方法を教授されたので、実際に人工浅場で試験しました。

種を集めるためのイケス網を作成し、三谷地先のアマモ場から6月に花枝を採取し、その後、水産試験場のイケスで管理し、9月に種の選別作業を行い実入りの良い種だけをパレットに入れ冷蔵庫に保管しました。そして9月下旬に海水温度が下がるのを待ち、アマモの種をまきました。種をまく前には、まいた種が流されてしまわないように、支柱、保護ネットを設置しました。(図11)

6. 波及効果

こうして行った移植や種まきの効果を見るために、毎月、調査を行ってきました。(図12) 平成15年5月に移植されたアマモは平成16年3月現在でも流れて無くなることもなく、順調に成長していました。(図13) 種まきした箇所には、アマモの芽は確認できませんでしたが、移植や、種をまいた場所より岸寄りに、種から発芽したと思われるアマモが確認されました。(図14)

7. 今後の課題や計画と問題点

こうして、これまで活動してきた成果がだんだん実ってきました。今後も、種まきの方法などを変え、試験を行っていく予定です。

私たちの活動が資源の増加に少しでも役に立てばと思っています。そして、豊かな海を取り戻し、次の世代に伝えていきたいというのが、なによりの願いです。

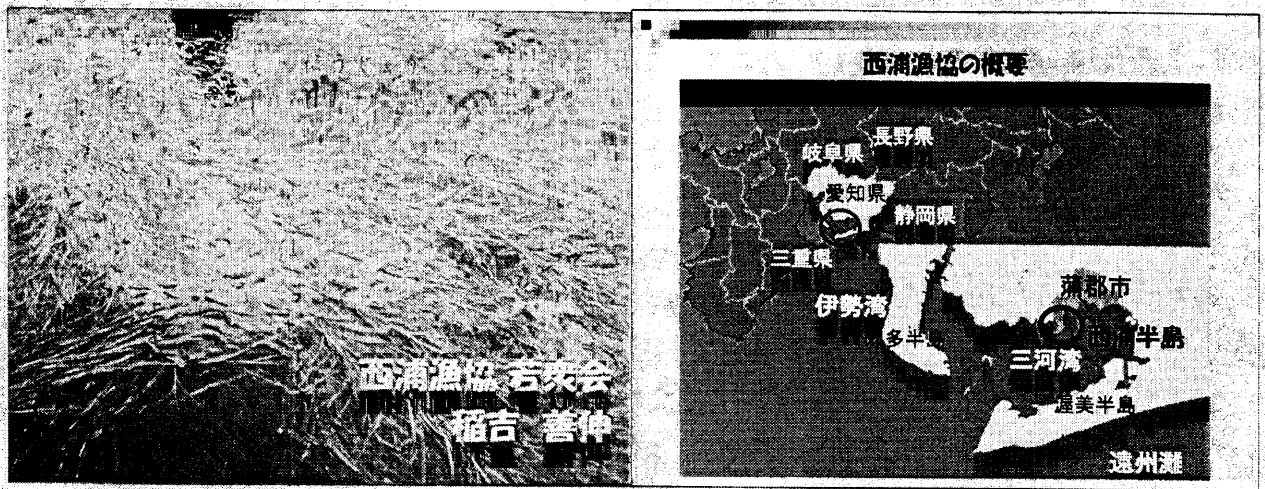


図 1

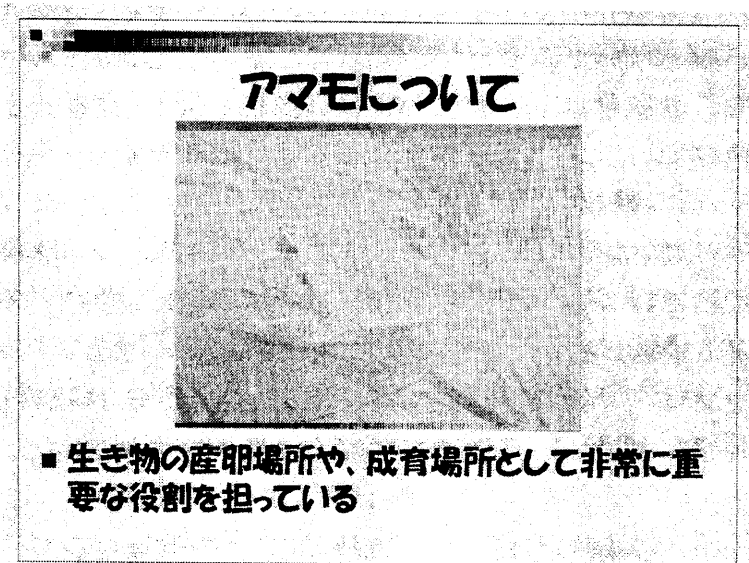


図 2



図 3

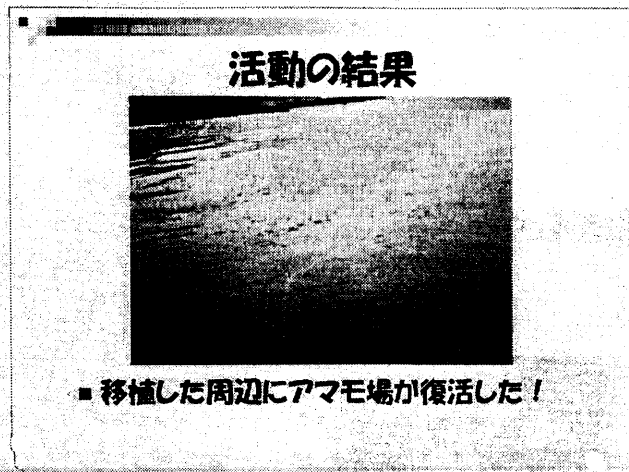


図 4

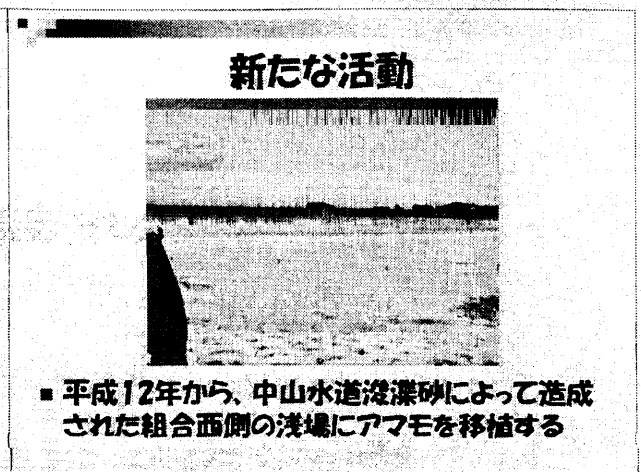


図 5

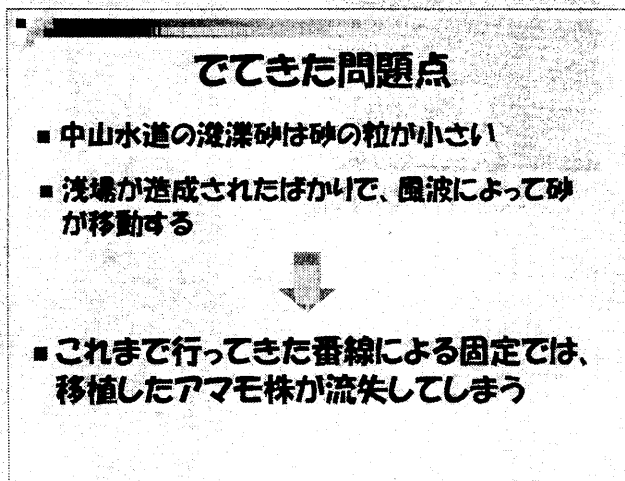


図 6

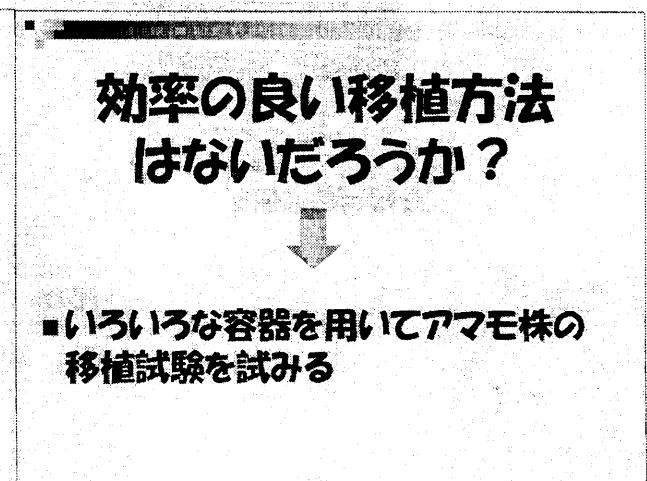


図 7

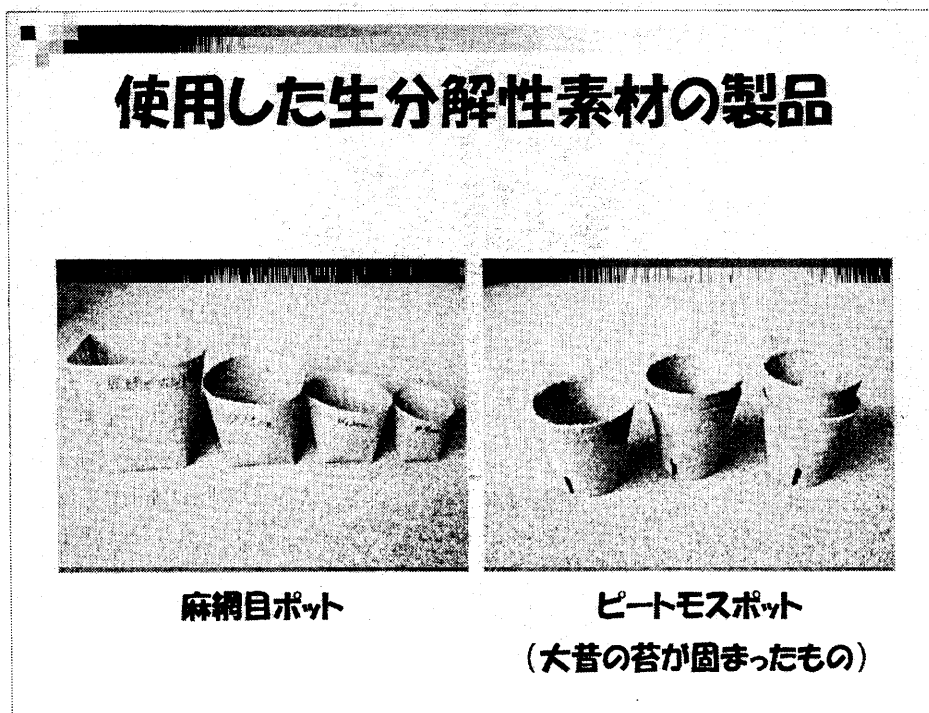


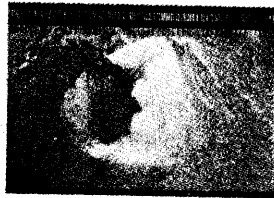
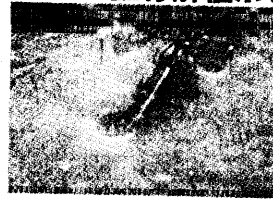
図 8

平成14年3月3日 西浦地先への移植

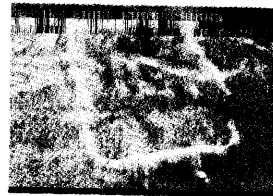
番線による固定



生分解性ポット



生分解性繊維袋



カゴに入れての移植

図9

移植されたアマモ株



図10

アマモ種子の播種

保護ネットの作成



保護ネット固定用支柱



保護ネットの設置

保護ネット

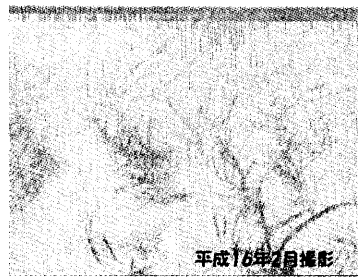
図11

移植場での調査



- 毎月目視による調査を行った

結果

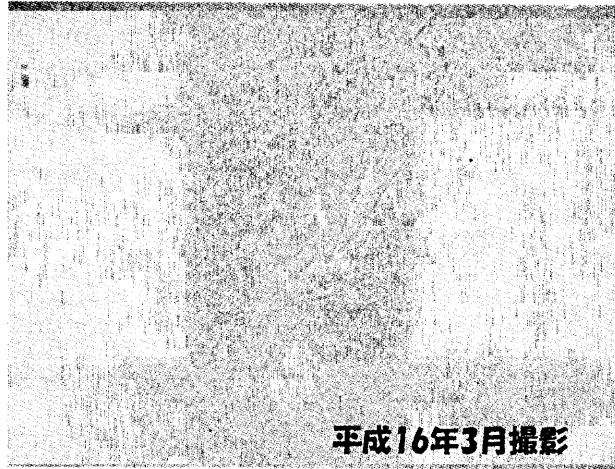


- 移植株は年間を通じて繁茂していた！

図12

図13

結果



- 種子からと思われる新芽が確認された！

図14

目指すは豊饒の海！

